

## 戦争と平和とを考える本

推薦図書：「防衛大学校で、戦争と安全保障をどう学んだか」

杉井敦、星野了俊 共著 祥伝社新書

水交会研究委員会委員 鈴木学

集団的自衛権の問題について、「戦争に巻き込まれる」、「戦争をする国になる」、「戦争に近づく」等の趣旨の言葉が国民の多数の意見として新聞紙面上を賑わしている。また、「日本人は戦争アレルギーである」とか「日本人は水と空気と安全保障はただで得られると思っている」という言葉もよく聞かれる。第2次世界大戦後は言霊の国ゆえ、多くの日本国民が軍事や軍備に関わることを忌み嫌い、それらを遠ざけることによって平和を希求する傾向が強かったように思う。

そのような日本において、将来の幹部自衛官を育成するため、一般教育に加え、「戦争」を真正面から見据え、安全保障上の様々な概念や戦史等を学ぶ防衛学（軍事学）や関連の理工学及び人文社会学を文理交差教育の手法を交えて体系的に教授する大学（外国では士官学校に相当）が防衛大学校である。私もかつて学んだ母校であるが、私の後輩で国際関係学科に学んだ57期生の二人が素晴らしい本を編んでくれた。今日ご紹介する「防衛大学校で、戦争と安全保障をどう学んだか」という新書である。

元来、国際関係論は学際的学問であるので、多角的、重層的な視点から国際関係を見ることが必要な学問である。防衛大学校国際関係学科ではパワー・ポリティックスの立場を中心に据え、様々な学問分野から国際関係を俯瞰していく。本書でも、ホッブスの自然権から起因する「万人の万人に対する闘争」状態、ハンス・モーゲンソーの国力の要素、軍事力の四つの機能、「戦争の敷居＝コスト・利益」等の古典的バランス・オブ・パワーの概念を紹介しつつ、第1次世界大戦以降の国家総力戦、冷戦期における様々な安全保障政策、ポスト冷戦後の戦争の形態の変遷・変容を織り交ぜつつ、防衛大学校で学んだ知識を民間人にも分かりやすく体系的に説明している。

自衛隊員の中で民間人に一番近く、頭が柔軟な世代が防衛大学校学生であろう。彼らが学び、会得した学問や議論というものは、国民一人一人に対して安全保障について分かりやすく説明する時の基本的なアプローチの一つであると思う。本書でも、戦争は絶対悪であると認めている。その絶対悪である「戦争」について考える時、「戦争」と聞くだけで怖い、嫌だと遠ざけて「戦争」を学ばなければ、戦争に備えることはできないし、平和を希求することもできないで

あろう。本書にも出典され、山本五十六元帥も書にしたためた言葉がある。「国大なるといえども、戦を好めば必ず滅ぶ。天下安らかなるといえども、戦を忘るれば必ず危うし」のとおりである。

「平和」を願うとき、その正反対にあり絶対悪である「戦争」を見つめ、その生起のメカニズムを研究し、「戦争」に至らぬ対策を立て、備えを怠らないようにする必要がある。アレルギー反応を起こして思考を停止させ、議論を止めてはならない。そして、一人でも多くの国民が安全保障について真剣に考えるようになれば、ハンス・モーゲンソーが言う国力の一要素である国民の士気も上がり、国力も増すことにもなる。

安全保障について、体系的に安全保障を学んだことがない人に、また、初歩から安全保障理論を学び直して整理したい人に、本書は素晴らしいテキストブックになるものと確信している。著者達自身がまえがきで語っている「右でも左でも中道でもなく、積み上げてきた理論と歴史によりながら、論理的に、科学的に思考し、ありのままの世界を見ようと努力しつづけること。それが防衛大学校で私たちが学んだ世界の見方です。」という姿勢こそが、その素晴らしさの源であると私は考える。

私達自衛隊 OB は民間の周りの人に対して本書の一読を勧めるとともに、自ら本書を熟読し、集団的自衛権の問題を含む国家安全保障について分かりやすく説明できるようになりたいものである。その観点から本書は大いなる助けになるものと思う。

本書冒頭に猪木正道学校長の言葉がある。「本当の平和主義とにせの平和主義との違いは、自国の国の主権と独立を守ることにより、国際の平和と安全に責任を果たすか否かに存している。そういう責任感に裏打ちされない“平和主義”は、主観的意図が善良か邪悪かにかかわりなく、直接および間接侵略の危険を招き、自国の安全と世界の平和を破壊する」との言葉である。安倍首相が述べている「積極的平和主義」( a Proactive Contribution for International Peace : 国際平和のための積極的貢献) につながる言葉であろう。

なお、二人の著者は、「一級のミリタリーは、一級のシビリアンでもある」と述べられた塩野七生さんの言葉に魅せられ、そのまた逆も真なりと考え、防大卒業後に制服を脱いで、シビリアンの立場から広く一般に向けて国家安全保障を語る活動をしている 25、6 歳の青年達である。一先輩としては、防衛大学校で学んだことのみで語る安全保障には「未だ本当の現場を知らない」という謙虚な自覚が不可欠であることを助言しつつ、今後の活躍を祈念したい。